



真宗大谷派 存明寺通信

NO.197

2020年(仏歴2551年)7月12日発行



お寺に来られる方々を出迎えるかの
ように、蓮の鉢がふたつ、玄關前に仲
間入りしました。いま、蓮の花が次か
ら次へと咲き続けています。
寄贈：藤井俊五総代 写真：住職

こんな時だからこそ

言葉との出会いを

生きる号外(門前配布用)

コロナによる自粛期間、26軒の
お寺がある「烏山寺町」を散策さ
れる方が増えてきました。そこで
その方々に『生きる号外(門前
配布用)』を作って門前の「ご自由
にお持ちください箱」に置いてみ
ました。文章量は極力短くして、
教えの言葉などで構成しています。
そんな「街ゆくひとびとへ」(仏さ
まの言葉)から。

◆死から逃れて迷う人あり
死を見つめて 目覚める人あり

◆言い訳が上手になると
信用は落ちる

◆遠くばかりを 見ている私
足もとを しっかり見なきゃ

◆ひとつの言葉に 励まされ
ひとつの言葉に 傷ついた
ひとつの言葉を 大切に

◆不安は 求めている
真実なるものを 求めている
いのちの うめき

◆さとりととは
賢くなることではない
愚かさ
気づくことである

◆ゆるしてもらって
生きていた私

◆習ったことはいけれど
「怒る」「欲張る」「嫉妬」は
とても上手なこの私



こんな時だからこそ

言葉との出会いを

コロナ禍を生きる中で新しく出会った言葉があります。こんな時だからこそ、言葉との出会いを楽しみたいものです。

▼ ウイルスは人を傷つけ 生きのびる私もです

コロナと私を同列に論じることができませんが、どこかでウイルスを敵や邪魔者のように思っていた私に、新型コロナウイルスをなんと自分に重ね合わせて見てみると、新しいまなざしを与えられた気分でした。自分を見つめることを大切にする浄土真宗の世界の言葉です。思わずドキリ。

▼ 人知るもよし 人知らぬもよし 我は咲くなり

(武者小路実篤)

「花の決意」と題された詩です。

自分がそこにいることを周囲に認められなければ、まるで自分の存在価値がないかのように感じてしまうのが人間ですが、人が知っていてもよい、知らなくてもよい、私に与えられた場所を私の居場所として、そこで精いっぱい花を開かせる。この詩にそんな凛とした生きる輝きを感じます。見習うべき生き様がそこにあります。

▼ 「私」ということが

問題にならない限りは人間にとっての出発は起こり得ない

(平野 修)

このコロナ禍の生活の中で、いろいろな「私」に出会ったのではないでしょうか。例えば、なんとなく感じるひとりぼっちの私、ちょっとしたことでイライラする私、望みが断たれつらいと感じる私。でもだから私はダメだというのはなく、それは、この私が問題になったということでもあります。問題となった私から出発する道が、浄土真宗という仏道です。この頼

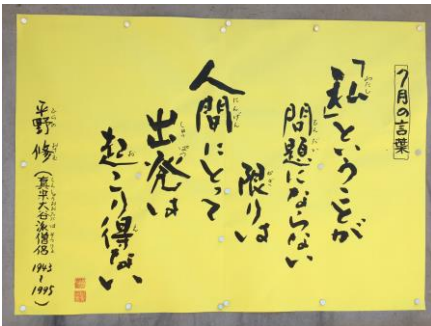
もしい道をしっかりと歩んでいきましょう。

依然としてコロナという厳しい状況が続いています。生き辛さや苦しみは目には見えませんが、この世界を覆っています。念仏にはこの現実を変える力はありませんが、この状況だからこそ私に響いてくる呼びかけは、確かにあります。そんな呼びかけに耳を澄ますことを、大切にしていきたいものです。

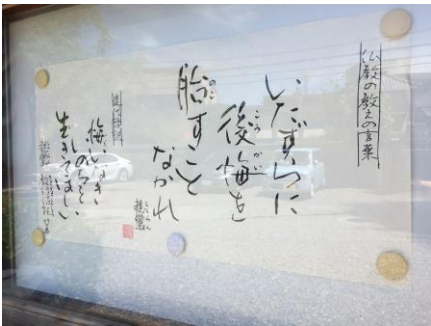
最後にお寺の7月の掲示板の言葉は左記の通りです。

(住職・釋諦信)

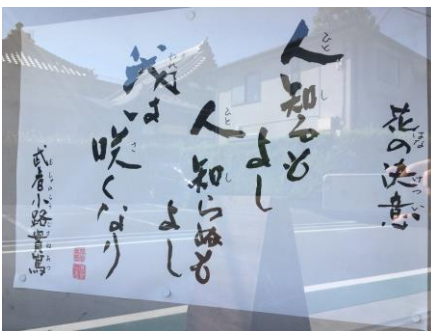
お寺の掲示板 (7月)



街角 「私」ということが問題にならない限りは人間にとって出発は起こり得ない



境内 いたずらに後悔を貽すことなかれ 悔いなきいのちを生きてほしい



門前 人知るもよし 人知らぬもよし 我は咲くなり

コロナたたきとハンセン病差別

新型コロナウイルスの感染者とその家族らに対する差別やバッシングが問題となっており、日本新聞協会なども、扇情的な報道にならないよう努めるとの共同声明を発表した。日本では、ハンセン病患者への激しい差別という忌まわしい過去があるが、その時との類似性はあるのか。反省は生かされているのか。識者に聞いた。

(文化部 小林佑基)



酒井義一氏

「ハンセン病首都圏市民の会」の事務局長で僧侶の酒井義一氏は、ハンセン病と新型コロナウイルスは病気の性質など違うものの、患者を差別するまでの構造が非常によく似ていると語る。

それは、よく分からない病への恐怖が、自らの身を守るかどうかの不安となり、患

患者ひとくくり化 原因

者を遠ざけ、差別に転じるというものだ。「特に差別心があふれ出てくるのは、人々をひとくくりにする時だ」と強調する。一人一人の持つ歴史や思いを捨象し、勝手なイメージを植え付けるからだという。

酒井氏は、連日更新される新型コロナウイルスの新規感染者数が、患者をひとくくりにする見方を強めると見る。「個人情報公表できないのは当然だが、その先に人間がいることをふと忘れてしまう」

ハンセン病でも同様に、各県で患者ゼロを目指した無らい県運動が、一人一人の顔を見えにくくした。そして地域社会から隔離した患者が、その後どういふ思いでいるのかは、ほとんど問題にされなかった。

「私たちには元々、人を差別する心があるが、多くは気付いてもない。今回も新型コロナウイルスをきっかけに表れてきただけだ。まずは内面を見つめ、心の中の闇に気付くことが大切だ」

無らい県運動 「らい病」と呼ばれたハンセン病の根絶を目指した国に協力するため、各県が地元警察などと連携して行った取り組み。自治体職員らが患者の家を訪問し、療養所への入所を勧奨した。1930年代に始まり、戦後も活発に行われた。

お寺のひろば 2020年(令和2年)

お寺のひろば 2020

9月から感染防止を徹底・時間短縮の上、お寺の行事を再開したいと考えています。が、今の時点では先が読めません・・・。

詳しくは存明寺ホームページトップの「緊急のお知らせ」等にてご案内をさせていただきます。

【今後の予定】

- 9月12日(土) 14時 樹心の会
 - 9月18日(金) 10時 清掃の甲 **中止**
 - 9月22日(火) 11時と13時 秋彼岸
 - 9月26日(土) 14時 グリーフケア
 - 10月10日(土) 14時 樹心の会
 - 10月24日(土) 10時 おみがき
 - 11月2日(月) 14時 報恩講の夕べ
 - 11月3日(火) 12時 報恩講法要
- 講師：田中顕昭師(長崎県)
- 11月14日(土) 14時 樹心の会
 - 11月28日(土) 11時 帰敬式
 - 12月12日(土) 14時 樹心の会
 - 12月19日(土) 14時 グリーフケア
 - 1月1日(元旦) 10時 修正会

子ども食堂・子育てサロン・子ども会も状況を見て判断いたします。



【得度披露】



▼去る6月23日、ご本山である京都・東本願寺において、得度式が行われ、存明寺から新しく2名の僧侶が誕生しました。高橋昭彦さん(世田谷区・存明寺世話人)と、住職の娘・酒井あゆみです。

▼高橋さんは、父と母との死別が縁となってお寺に関わるようになり、以来お寺の行事にはほとんど参加され、存明寺世話人やグリーフケアのスタッフをしています。このたび定年を機に、自らのよりどころを求めて得度を決意。得度式では、「得度は一生に一度の儀式」との言葉を聞き、身が引き締まる思いがしたそうです。「やっとここまでたどり着いた」と感慨深く語っておられました。

▼また娘のあゆみは、社会人としておりましたが、以前に東本願寺で行われた報恩講奉仕団に参加した際、講師の方から「人からどう見

られるかという評価に怖れ、振り回されて、そのことが苦になる。しかし、道がないわけではない。苦から解放される道があることを信じて、あきらめないことが大事」という法話を聞き、仏教が日常生活に深く通じていることを初めて知り、さらに深く学びたいと、今回僧侶となりました。

▼僧侶となるということは、仏道を求めて歩む「求道者」になるということです。あらためて皆様のお仲間としてお付き合いくださいますよう、よろしく願っています。

▼この経験したことの無いコロナの状況を、悔いなく生きて、再び密に出会う時を！と願いつけております。どうぞお元気で過ごしてください。

(住職・釋諦信)

東京都世田谷区北鳥山4-15-1
真宗大谷派 存明寺
住職 酒井義一(釋諦信)
〒157-0061 TEL 03-3300-5057
FAX 03-3300-5880
E-mail : sakai@zomyo.ji.jp